

日本ハーディ協会ニュース  
NEWS from THE THOMAS HARDY  
SOCIETY OF JAPAN



第75号 (2014年4月1日)

発行者 〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3  
東京理科大学1号館1603A研究室内 日本ハーディ協会  
編集者 〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137 京都精華大学 北脇 徳子



LABOUR by J. Linnell

(提供：那須雅吾氏)

## トマス・ハーディの描いた「夜」の深意について

那 須 雅 吾

『チャタレイ夫人の恋人』(1928)の作者であり、「ハーディ論」(1936)の著者で、ハーディの影響も受けていると云われている D. H. ロレンス (1885-1930)は、彼の評論 *Fantasia of the Unconscious* (1922)の中で、現代人が昼と夜とを取り違えた生活をしていることをはじめとして痛烈な現代文明批判を展開している。

彼の論によれば、われわれ現代人は‘the day self’を夜の時間にまで延長し、晩さん会・パーティなどに費やしているために、‘the night self’が昼の時間に食い込むという昼夜逆転の不自然・不健全な生活をしているのである。それは人間の最も自然な生活が日の出と共に起床し、日の入りと共に家路を急ぐという一日の自然のサイクルに応じた生活だからである。この彼の論は、長年にわたって「夜」や男女の関係・交わり、営みの描写をタブー視、あるいは無視してきた不自然・不健全な英国社会への批判の根底をなしているものであり、彼の性哲学の基調となっ

ている。

このロレンスの先輩であるハーディは、小説を書くにあたって、特に「夜」の描写をはじめ、女性描写などについては当時の社会からのタブー視、圧力を意識しなければならなかった。というのも、先輩たちのデイッケンズ（1812-70）、サッカレイ（1811-63）などを中心とした作家たちが、社会のタブー視化している対象には敢えて触れようとはしなかったからである。ハーディは昼間の理性中心の外的世界は描いても、夜の人間の自然な感性中心の内的世界には触れず、都会的人間を中心とした人間の半面だけ、しかも表面しか描かない従来の作品では到底満足できなかった。そのために、彼が生まれ育ち最も熟知している農村、自然の動きに合った生活をしている農村・田園生活に着目し、開放的で自然に順応した人間本来の生き方をしている農民たちを描写することで、初めて自然な人間生活の全体像を描き出せると考えたのである。

ハーディは、小説・詩などの多くの作品で、非常に多くの夜の世界を描いた作家である。中でも注目すべき作品は、*The Return of the Native*（1878）のエグドン・ヒースを初めとした夜の描写、*A Pair of Blue Eyes*（1873）の「名もない断崖」、更には *Tess*（1891）、*Jude*（1896）などの夜の描写であるが、更にそれが詩作品になると、その大半を夜の描写で占めている程である。しかし、当時の社会の外圧やタブー視を意識しながら、作品を書くということは、ハーディにとって大変な勇気と決断を必要としたに違いない。中でも、『帰郷』の場合は、彼が余り世に知られていない駆け出しの作家であっただけに、作品のプロット・構想については異常な神経を使っている。というのは、『帰郷』の冒頭に描かれている非常に難解なエグドン・ヒースの日没から夜に移る情景、その微妙で繊細な描写には、ハーディの並々ならぬ深い意図が感じられるからである。したがって、このエグドンの宇宙的描写は、宇宙の動きに呼応した登場人物たちの自然な、人間的営みを描き出すための彼の独創的な導入部分と考えられるのである。そのことを裏付けているのは、エグドンが時間的変化によって美と醜という質的变化をしているように、そこに住む人間たちも、ユーステイシアが神格化された‘Queen of Night’として美化され、テスも女神という美的変身をしているが、朝の光と共に、再び元の平凡な乳搾り女に帰り、ユーステイシアはジョニー少年の母親やヨープライト夫人によって醜悪な魔女と化している。ここにも、夜の暗闇と人間の心の暗闇・潜在的想像力が織りなす美と醜のドラマが見られるのである。

エグドンの村人たちも昼間は社会的な外圧の中で生き、夜になると、昼間の外圧から解放され何物にも干渉されない、自分本来の自由奔放な個を取り戻している。その具体的な描写は、この作品のヒロインであるユーステイシアがクリムと結婚後、憂さ晴らしに出かけた「ジブシー踊り」や『テス』の週末の縁日に村人たちが個を開放し、官能的で、自由奔放な状態に陥っていることにも表わされている。また、『テス』ではテスたちの乳搾り女たちの寝室が、エンジェルへの思慕の情で熱気をはらみ、むせかえっていることにも見られるが、そこでは昼間の文明社会が作り上げた様々な衣服をまとった女性たちの姿ではなく、何物にも束縛されない女性本来の、自然な美しい原初の姿・イブの姿が描き出されている。

さらに、アレックに犯され、出産・愛児の死という苦難を経験し、昼間は社会という人間の集団の目が常にテスを監視し、恐怖感・圧迫感を与えているのであるが、夕暮時・夜こそ、彼女を昼間の圧迫感から解放し、安らぎ・精神的自由を与えてくれる唯一の避難の時間であり、彼女が個を取り戻し、個へ帰る時なのである。そして、またテスが‘mind's eye’と云っているように、夜は彼女の魂が眠れる肉体から離脱し、自由に宇宙を飛翔できる潜在意識・空想力を体験できる時でもある。そのことは、ジュードがしばしば学者や聖者の亡霊たちに語りかけ、話し合う夜の場面にも見られることである。

しかし、このような夜も、個の内的・精神的解放・謳歌という美的効果をもたらす反面、人間の内的暗闇・暗黒の世界を生み出す醜悪で残酷な面、つまり内的解放感から他を傷つけ、あるいは死への衝動へと駆り立てるといった醜的・破壊的役割も果たすのである。それは昼間の疲れか

ら眠っているテスが愛馬プリンスを事故で無くするのも夜であり、アレックに犯されるのも夜であるし、クリムと別れたユーステイシアが身投げするのも夜である。エンジェルに棄てられたテスが死の衝動に駆られるのも、またジュードの子供が弟たちと死を選ぶのも、ジュード自身が自分自身に愛想をつかして自殺を思いつくのもすべて夜である。その意味で、『帰郷』はハーディが描いた「夜」の描写の原点であり、更にハーディ文学の原点であると言っても過言ではないかもしれない。

このような夜の描写への批判・非難は、特に夜の描写の多い後期作品に集中しているが、表面的‘reality’ではなく、あくまで‘deeper reality’ (*Life*185) を目指していたハーディの真意を当時の読者は到底理解できなかったに違いない。というのは、ハーディがそれまでの作家たちが触れなかった「夜」の描写に敢えて挑戦し、フロイト (1856-1939) やユング (1876-1961) などの人間の潜在意識・精神分析・夢判断とも相通じる人間の内的世界を描いていることから考えると、ハーディが描いた「夜」の深意には、読者が到底読み取れない、彼らの理解を超えた深い意図が秘められていたからであろう。

## マンスフィールドの手紙と日記から

久保木 雅 子

キャサリン・マンスフィールド (Katherine Mansfield 1888-1923) の日記や手紙には、ハーディの人柄や小説や詩についての記述が幾つか見られる。彼女よりも深くハーディに心酔していた夫で文芸批評家のジョン・ミドルトン・マリが、1919年1月に30歳で *Athenaeum* の編集長になり、巻頭を飾る詩をハーディに依頼したことから、マリとハーディとの交流が始まる。*Athenaeum* にはマンスフィールドも書評を書いたり、‘The Young Girl’ (1920)、‘Miss Brill’ (1920)、‘Bank Holiday’ (1920) などを寄稿しているが、マリとマンスフィールドとの間で、ハーディについてしばしば話題にのぼっている。

療養先の南仏からマリ宛てに書かれた1918年6月5日付けの手紙 (Vincent O’Sullivan and Margaret Scott, ed., *The Collected Letters of Katherine Mansfield*, Vol.2, Oxford Univ. Press, 1993, p.219) の中で、彼女は *The Well-Beloved* について手厳しい評をしている。この小説はまったく、途方もなくつまらない、読む気がしなくなる、退屈で、もったいぶったところがある、とても悲惨だ、文体もばかっている、ハーディには時として不合理な、俗物的な、教師的なところがあるが、これは気質の研究だということを考えても彼に恥じる気持ちがほしいものだ、と痛烈に述べている。1921年5月24日付けのマリへの手紙 (*The Collected Letters*, Vol.4, pp.237-8) には、*The Dynasts* についての評が見られる。二晩読んだが、こんなにも理解できないのはおかしい、ところが昨夜突然、詩人が言おうとしていること、読者にどんな風に読んでほしいのかがわかった、それは想像から、想像上に差しこむ一条の光のような、いわば、頭上を流れるコーラスと妙なる調べのようなもので、もし、詩劇というフォームが可能ならば、将来、それは *The Dynasts* のようなものになるだろうと私には思える、舞台のために書かれていながら上演不可能なもので、それだけ自由に書ける、*The Dynasts* を読む時、それはいつも舞台上で演じられているかのようだ、しかしその舞台とはいわゆる通常の舞台ではなく、私たちの心の内にある舞台のことである、すべて非常にほんやりしているが、本当に私はあなたのそばで劇を見たのだが、それはこのフォームの結果なのだ、と書いている。ハーディは1922年10月12日付けの J. H. Morgan への手紙

に、「一つの視点から見る絵として、読者の心の目で見てほしい」と書いているので、このマンズフィールドの理解は的を射たものといえよう。

結核のため34歳で早世したマンズフィールドは、死を間近に感じていた1919年から1921年にかけて、ハーディの詩を度々引用し、日記に書き留めている。いずれも*Satires of Circumstance*からの5編で、若き日々への回想や墓や死後のことが書かれた詩を引用している。‘Bereft, She Thinks She Dreams’ (314) の第1スタンザの最初の3行と第2スタンザの終わりの4行、彼女の病気と金策から逃げ腰のマリとの関係を想像させる ‘The Spell of Rose’ (295) の第5スタンザ、冷たく深い地下の世界を描いた ‘The Year’s Awakening’ (275) の第2スタンザ、*Poems of 1912-13*の中の ‘Lament’ (283) の第1スタンザは、エマ夫人と同様に、生前園遊会を開いた彼女の母親へ想いを馳せ、母親の命日にあたるその日の日記にはただ1行、‘I hate this book. So awfully!’ と記している。愛犬までも自分の墓を忘れていると、ユーモラスな中にもペイソスのある ‘Are You Digging on My Grave?’ の第6スタンザを書き留めている。

死期近く、フォンテーヌブローのグルディエフ協会にいた時も ‘I wonder if dear old Hardy will write a poem this year.’ (1922年12月17日のマリへの手紙) と、82歳の高齢のハーディが詩を書くことを期待している。彼女は「ハーディの詩はすばらしい、とても身近に感じられる、いつ読んでも泣きたくなる。愛と悔恨がそっと触れ合い—あの秋の調べ—“ごくごく稀に、美は移ろう…”」(*The Collected Letters*, Vol.4, p.301) という人生への哀惜の念にあふれるハーディの詩を愛好している。

いつかハーディに会ってみたいというマンズフィールドの希望はかなわなかったが、彼女の死に際して、ハーディは、‘…We were, of course, quite familiar with Mrs Murry’s books, which are what the world regrets to have no more of: …’ という哀悼の手紙 (1923年1月21日付け) をマリに送っている。(R. L. Purdy & M. Millgate, *The Collected Letters of Thomas Hardy*, Vol.6, Oxford Univ. Press, 1978, p.184)

マンズフィールドの死後のことであるが、マリは作家を志すヴァイオレットと再婚し、Max Gateの近くに転居し、生まれた娘を連れてハーディを再訪している。娘の名前はキャサリン、‘godparents’ はハーディ夫妻だった。ハーディは9ヵ月になるキャサリンを膝に乗せて、ハンカチで兎の形を作ったりしたという回想を後に話している。(Michael Millgate, *Thomas Hardy: A Biography*, Clarendon Press, 1982, p.532) また、マンズフィールドと同じく結核を病むヴァイオレットのサナトリウムなどの治療費が莫大なため、王立文学基金の後援を得るためにエドモンド・ゴスが特別助成金を首相に申請してくれ、フローレンス・ハーディが250ポンドの小切手を届けるために、マリ夫妻の家を訪ねた (Kathleen Jones, *Katherine Mansfield The Story-Teller*, Edinburgh Univ. Press, 2010, p.185) ということもあり、マリはその後もハーディ夫妻と親交をあたためていた。

## ハーディと私 その後

清水 伊津代

「協会ニュース」の北脇徳子編集長からご連絡があり、『日本ハーディ協会ニュース』に長年掲載してきた「ハーディと私」の欄に加えて、数年前から「ハーディと私 その後」という欄を設けているので、すでに「ハーディと私」を書いた年配者（そうは明言されなかったけれど）に

〈楽しいその後〉を執筆するよう依頼しているのだ、とのことだった。すっかり忘れていたけれど、そう言われてみればずっと昔そういうものを書いたなあと思い出して、書棚の隅から、該当する『日本ハーディ協会ニュース』をやっと見つけ出した。それは第27号で、1990年4月10日の発行。24年前のものである。そして驚いたことに、それと一緒に、1977年12月1日付の故大沢衛先生からのお手紙も出てきたのである。そのお手紙は、1977年大会で「迷宮の旅——*Tess of the d'Urbervilles*」の研究発表をさせていただいたわたしを温かく励ましてくださるもので、故飯島隆先生のお手紙からの引用「俊秀きら星のように並び、女性の進出（——ことに「迷宮の旅」——）にも圧倒されました」も添えられていて、若いわたしは嬉しく思い大切に保管していたのだった（こちらの方もすっかり忘れていたけれど）。

その後これを励みにしてハーディ文学の研究に邁進しました、となればよかったのだが、実際はそうではなくて、研究は遅々として進まずだったことを、24年前の「ハーディと私」の文章は示している。申し訳ないことである。

「ハーディと私」を執筆した頃、わたしはそれまでの考察から、ハーディのテキストは構造主義的手法で書かれたものだと確信を得ていて、特に後期小説の*Tess of the d'Urbervilles*と*Jude the Obscure*のディスコース構築にそれが明らかだと思っていた。その頃同時に、まだノーベル文学賞受賞前で流行作家とはほど遠かった大江健三郎の小説群をある読書会で読み進めながら、大江のテキストもまさしく構造主義的方法で構築されていると気づいたのだった。それでわたしは、「ハーディと私」で、両作家のテキストのディスコースに見られる〈両性具有の神話〉のメタファーやシンボリズムに触れ、それが暗示する〈人間の宇宙的全一的至高存在〉のイメージとメッセージ（エリアーデ『神話と夢想と秘儀』、ゾラ『アンドロギュヌスの神話』ほか）が小説の基本構造にしっかりと組み込まれているので、両作家の〈魂の救済〉や〈生への励まし〉のメッセージも力強く伝えられているのだ、という旨を述べた。たとえば、ハーディの*Jude the Obscure*と大江の『人生の親戚』に共通する、子供たちの自殺を含むプロットの構築、キリスト教と人間存在の問題、性の問題、両性具有神話のシンボリズム導入などは、大江がハーディの直接的影響を受けたわけでもなく生じたものなので、まさしく両作家の構造主義的文学観がなした結果だと見えたのである。

その後、ハーディのテキストをじっくりと読むうちに、わたしの見方は24年前のそれとは少しだけ変わって、今では、ハーディは自己解体的多様のディスコースを駆使するポスト構造主義の作家ではないかと思っている（「少しだけ変わって」と言うのは、ポスト構造主義も構造主義の一部であるとみなされているからだ）。

たとえば*Tess of the d'Urbervilles*の場合、ハーディはテキストの全体的構造を支えるものとして、両性具有神話のシンボリズムとともに、ダーバヴィル伝説や迷宮神話のシンボリズムを用い、人間存在の時間的空間的意味を提示している。ところがハーディは、そのような不動のテキスト構築の陰に、テスの〈ダーバヴィル家の出自〉そのものが不確実であることを匂わせているのである。たとえば、小説の初めてトリングム牧師に「怪しげなこの家系図では……」と言わせ、また最後のパラグラフでは語り手に「そしてダーバヴィル家の騎士や貴婦人はわれ関せずと墓の中で眠っていた」と語らせているように。*Tess of the d'Urbervilles*というテキストは、ハーディの隠れた意志がテキストに確実性と不確実性を与えることにあった、と暗示しているように見える。そしてハーディは、テキスト自体の不安定性表出を楽しんでいるようにも見えるのである。

*Jude the Obscure*の場合も同じである。ハーディは、中心人物ジュードとスーを通して人間存在の闇と希望を描くこのテキストの全体的構造に、両性具有神話のシンボリズムをきっちりと組み込んでいく（たとえば、明確にそれと分かる言及箇所だけでも8か所ある）。そうして二人の両性具有的合一が宇宙的完全性を表象するものであると暗示する一方で、ハーディは、スーの中にある「両性具有的な優しさ」や「美少年ガニメデスのような」容貌にも触れて（Ⅲ-4）、

スーが自らのうちで自己完結する両性具有者であるとも暗示しているのである。ハーディはそうようにして、根本で二人の合一を不可能とする要素を入れながら、テキストの脱構築の力と不安定性を表出しているのである。

少し前、Florence E. Hardyの名前で出版しているが実はハーディ自身が書いたことが明らかな、*The Life of Thomas Hardy*の翻訳のために、ハーディのディスコースの中の息遣いやリズムや思考方法を、来る日も来る日も、朝から晩まで感じ続ける経験をしたことがある。その経験で分かったのは、ハーディは一貫性や統一性や安定性のある文章を書こうとするが、それができた途端それを崩しにかかる、ということであった。ハーディのディスコースは、多様な視点を入れて意味の一元化を回避し、変化と異質性に満ちた人間や世界を表現することを目指しているようである。それはまさしく、ポスト構造主義の作家の文体と思想であろう。24年もかかってこのようなハーディ認識に行き着いたことが、わたしのささやかな「ハーディと私 その後」である。

## ハーディと私

土屋結城

思い返してみると、中学生か高校生のころに洋画好きの母を通して、『テス』という映画の存在を知ったのが、ハーディ作品との最初の出会いだったかもしれません。もっとも、母と違い熱心な映画ファンではなかった私は、そのときにちゃんと映画を観ていないのですが。

私がそれと意識して初めてハーディ作品を読んだのは、津田塾大学に入学してまもなくのこと。英文学科1年生対象の川本静子先生ご担当の講義科目で、先生が訳された『日陰者ジュード』が課題図書となり、あらすじからして暗そうな物語だと思い、またその長さにもおのきなながら、しかし、読み始めてみるとなぜかページを繰る手を止められず、一気に読んでしまったことを覚えています。

次にハーディとがっぷり四つを組んだのは、大学2年の講読の授業でした。英語で行われる英文学科必修のこの授業で、高桑美子先生のご指導の下、『テス』を原文で読みました。かわいらしい少女の顔が表紙のOxford World Classics版を購入したものの、最初の1ページ目から単語がまったくわからず、英英辞書を調べてみてもますます混迷は深まり、しかし、容赦なく授業は進むため、辞書を引き引きなんとか授業をやり過ごすという日々でした。とは言え、テキストの難しさに戸惑いながらも、『テス』で印象的な色彩の構図（テスの唇、アレックのシガレット、イチゴの赤など）について学んだり、チェイスの森の中で、テスがアレックといながら寝入ってしまう、議論の絶えない第1章の最後の場面を精読し、作品の面白さに触れることができました。同じ授業を履修していた友人たちと、ようやく『テス』の映画を観たのもこのときでした。映画を観たあとは、みなでナスターシャ・キンスキーの美しさについて熱心に語り合っていました。

その後、しばらくはハーディを専門的に勉強することではなく、卒論も『ジェーン・エア』で執筆し、大学院に進学しました。卒論を執筆したころから語りの技法に興味を持ち始め、修士課程では、高桑先生のご指導の下でジョン・ファウルズについての研究を進めました。しかし、修士論文を書き進めれば書き進めるほど、ファウルズの*The French Lieutenant's Woman*に見られる画期的な技法を理解するには、ヴィクトリア朝の小説への理解が不可欠であることを痛感しました。

博士課程では、ヴィクトリア朝小説、特にファウルズが影響を受けたと公言していた、ハーデ

イ研究に本腰を入れることになりました。(このときも、洋画好きの母は、ファウルズの作品こそ読んでいなかったものの、『フランス軍中尉の女』の映画を観たことがあったらしく、「なんだか難しい話だったわよね」と私に言ってきたものでした。)

博士課程在学中に、レディング大学の修士課程に留学し、そこでGeoffrey Harvey教授ご担当の授業が行われる予定だったのですが、なんと、たまたまその週にイギリス全土で大学教員のストが行われ、授業がキャンセルになってしまうというハプニングがありました。授業計画表によると、その失われてしまった授業は、『ジュード』のスーを中心にNew Womanについての考察を行う予定でしたので、今思い返しても残念だなと思います。

レディングでのコースは、若い教授陣が中心となって授業計画を立てていたためか、キャンオンではない作品を多く取り上げることも多く、さらに文化研究にも目を配っていたため、dissertationは文化研究寄りになりました。当初はハーディ作品を中心に、と思っていたのですが、スーパーバイザーとの話し合いや論文構想発表の際のやり取りなどから、ヴィクトリア朝における自殺あるいは自殺者の表象について書くことになりました(もともとは、『ジュード』におけるリトル・ファーザー・タイムの死に対する疑問から生じた計画ではありましたが)。私が最も興味を持ったのは、自殺という行為が、個人の責任に帰するものなのか、社会の責任に帰するものなのかという議論でした。帰国してからは、またハーディ作品を中心とする研究に戻りましたが、これ以降も、個人と社会の関係というテーマはずっと私の心に残ることになりました。

帰国後に書いた博士課程終了報告論文では、ハーディの諸作品において、共同体と個人の関係がどのように描かれているかを論じました。

個人と共同体といえば、『帰郷』や『森林地の人々』のように、ひとところを舞台にした閉鎖的な共同体が描かれることもあれば、『テス』や『ジュード』のように、主人公が移動し、さまざまな共同体と関わる/関わらない作品もあり、興味は尽きません。

ハーディ作品を研究対象にすると決めてからは、彼の作品を読むのにも身構えてしまうことはありますが、まず何よりも作品が面白いので、読み始めてしまえば、一読者として、登場人物に感情移入し、プロットのツイストに翻弄され、いつの間にか読み耽ってしまいます。研究対象としては、そうしていつの間にか読んでしまった箇所を、再度あるいは再々度じっくり読む必要がありますが、それでもやはり読み耽ってしまうところに、もしかするとハーディ研究の難しさがあるのかもしれない。

## 第56回大会印象記

金 谷 益 道

日本ハーディ協会第56回大会は、2013年10月26日(土)、清宮倫子氏のお世話により、茨城キリスト教大学11号館11203教室で開催された。当日に大型台風が関東地方に接近すると一時予想されたため、大会の開催が危ぶまれたが、渡千鶴子氏による総合司会のもと、無事に開会し、研究発表が始まった。

午前の研究発表では、まず糸多郁子氏の司会のもと、田口秀樹氏が「ハーディの小説(ebook版)におけるLoveとDeath」と題した発表を行った。田口氏は、愛と死が入り混じりながらプロットが進んで行くハーディの小説に、“Love”と“Death”ということばが何度出てくるのか、ebook版のテキストを用いて検索した結果をグラフ化して提示された。田口氏は“Love”と

“Death”は「生と死」のような対の関係にあるものだと指摘し、“Love”と“Death”の出現頻度が各小説でどのように異なるのか、これらのことばがどの辺りのCHAPTERに多く現れているのかといった点を中心に発表をされた。

次に、坂田薫子氏の司会のもと、鈴木淳氏が「物語の始まりはどこか？—センセーション小説における女性主導のプロット」と題した発表を行った。鈴木氏は、ウィルキー・コリンズやハーディのテキストにおける物語のプロットが「男性中心」であるという従来の批評に疑問を投げかけ、*The Women in White* のアン・キャスリックやスーザン・ヘンチャードといった女性に注目し、一見すると男性のプロットの犠牲者やサブキャラクターのように見える彼女たちが、実際には男性のプロットを誘導し、しかも終始そのプロットに影響を与える存在であるのだと指摘された。鈴木氏は、これらの女性がいかに通常のジェンダーの役割の制限を超え、他人の願望を操作しながら自分の願望を成就させているのか、一見願望を成就できないまま死んでしまうこれらの女性が、死後も男性の物語に影響を与えている点などを指摘しながら証明し、従来「受動的」と思われていた女性の願望の物語プロットこそが、ハーディやコリンズたちの「センセーション小説」というジャンルの特徴の一つではないかと結論づけられた。

引き続き坂田氏の司会のもと、北脇徳子氏による「ハーディ小説にみる読書と教育—再考」と題した発表が行われた。北脇氏は、労働者階級出身であることや、大学教育を受けていないことを気にしていたハーディは、自らの体験を登場人物に重ねて教育問題を小説の中で語っていると指摘された。北脇氏はハーディの受けた教育、聖書や古典文学などの読書歴をたどり、ハーディと同じように、独学で知識と教養を身につけた彼の小説の登場人物を中心に考察を進められた。北脇氏は、正規の教育を受けなかった作者の代弁者として、エリザベス＝ジューン、ジュード・フォーリー、そして頭の中ではすべての固定観念から解放された進歩思想を持っているにも関わらず、心の奥底は依然として因習に縛られている知的な近代人として、クリム・ヨーブライト、エンジェル・クレア、スー・プライドヘッドを挙げ、知的な近代人と彼らの問題を描くことによって、頭の中だけの知的教育にハーディは疑問を投げかけていると指摘された。

再び糸多氏に司会を交代し、最後に、萩原美津氏が「*The Well-Beloved: A Sketch of a Temperament*を読み直す」と題した研究発表を行った。萩原氏は小説のエピグラフ（“One shape of many names”）での引用からもわかるハーディのP・B・シェリーに対する崇拜についてまず触れ、シェリーのプラトニックな理想を追い求める登場人物たちがハーディ小説の特徴だと指摘された。次に、萩原氏は、ピアストンが続けて恋に落ちる3人のAviceや、他の女性キャラクター、女神アフロディテなどに焦点を当て、*The Well-Beloved*における女性性の表象を考察された。萩原氏は、Aviceの語源が「鳥」を意味する点や、アフロディテと関係がある鳥（dove, swallow, swan）と3人のAviceとの関連性の他にも、鳥とつながりのある箇所がテキスト上に多くあるといった指摘をされた後、ピアストンを新古典主義者としてではなく、ラファエロ前派の芸術家としてとらえ、*The Well-Beloved*における芸術家の表象についても考察された。

計4名の研究発表終了後、昼食休憩をはさみ、会場校を代表して茨城キリスト教大学学長の小松美穂子氏が挨拶を述べられ、その後、総会において諸報告がなされた。

総会終了後、「トマス・ハーディにおけるヴィクトリアニズムと<信仰>」と題したシンポジウムが行われた。司会と講師を向井秀忠氏が兼任され、講師の紹介と、信仰ということばを山括弧つきで表記したのは、キリスト教などの宗教的信仰のことではなく、色々なものを信奉するといった広い意味でとらえてもらいたいためであるといった説明をされた後、建築史が専門の近藤存志氏にパトナタッチされた。近藤氏は、後年キリスト教信仰から離れたと考えられているハーディ像について疑問を提起し、生涯を通して維持し続けた教会建築との関わりや、彼の人脈や、当時触れていた情報等を調べると、彼がキリスト教に対して批判的であったという考えは改められるべきだと指摘された。近藤氏によると、『ジュード』のタイトルページにある“The letter

killesh” や、ジュードの最後の「ヨブの嘆き」などにあらわれているように、ハーディが批判対象としたのは、キリスト教そのものではなく形式主義に陥ったキリスト教会であったのだ。近藤氏は、新古典主義派とゴシック・リヴァイヴァル派の間での建築様式論争が盛んだった時代を生きたハーディは、ゴシック・リヴァイヴァリストの建築家たちと関係が深く、形式主義に陥ったキリスト教会とのハーディの決別も、新古典主義の形式主義に反対し、建築が表現すべき精神性を重視したゴシック・リヴァイヴァリストの一人だと彼を見なせば、受け入れやすくなると指摘された。その他にも、中世を理想化しながらも科学、技術、産業も同時に重視した態度など、ゴシック・リヴァイヴァリストたちとハーディの共通点を指摘された後、近藤氏は、不可知論の立場から理性を重んじる者が反宗教化しないのはイギリスの伝統であり、ハーディの「宗教と理性の調停」の試みもこの伝統の上にあるものであり、ハーディは、本質的には、反キリスト教の立場にはいなかったと結論づけられた。

引き続き、福原俊平氏が、一般的に伝統的キリスト教的価値観と衝突するものとされてきたダーウィニズムが、ハーディにとって、キリスト教の代わりとなる一つの〈信仰〉のような働きをしていたという前提に立ち、『テス』や『ジュード』といったハーディ小説におけるダーウィニズムの影響を、ダーウィンの進化論における道徳や利他主義という観点から考察された。福原氏は、「利己的な個体は幸福になるが、報われることのない利他的な個体がいなければ集団全体は機能しない」という、ダーウィンが指摘した、社会的な動物の集団に見られる利他主義のパラドックスに注目し、利他主義のために生存競争に勝ち残れないテスやジュードの姿を考察された。福原氏は、利他主義のために勝ち残れない二人のような人間こそが、社会にとって真に価値があることを示唆する場面の存在に注目すべきであり、ハーディ小説においては、当時のキリスト教的道徳が批判されている一方、生存競争に勝てない存在に価値を見出すという形で、キリスト教的な因習的道徳とは違う種類の道徳が提示されていると結論づけられた。

最後に向井氏が、19世紀は科学的な発想からキリスト教に対する懐疑心が深まった時代だったが、懐疑心が深まれば深まるほど、逆説的にキリスト教を求める傾向が強まった時代でもあったと指摘し、『テス』と『ジュード』に見られるキリスト教に対する態度を考察された。向井氏は、例えば『テス』では、キリスト教に対してテスが否定的な態度をとるきっかけとなったと見なされることの多い、ソローの埋葬にまつわる場面でも、キリスト教そのものというより、牧師個人や牧師が代表するイギリス国教会の硬直化してしまっただけの因習的な制度に、テスの批判の矛先が向けられていると指摘された。向井氏は、反キリスト教的な側面を強調したエピソードが多く出てくると評される『ジュード』にも同様の分析を行い、スー・ブライドヘッドは、聖書の誤った使い方をするような者を強く否定している彼女の台詞などからわかるように、聖書そのものを否定しているわけではなく、テスと同じく、キリスト教そのものよりも制度として硬直化した当時の教会の在り方を批判しているのではないかと述べ、最後に『テス』や『ジュード』を、宗教的意識が高まってきた時代にある種の新しい考え方を追及した作品としてとらえる読み方が可能ではないかと指摘された。

シンポジウム終了後、永富友海氏の司会のもと、井出弘之氏による特別講演「ヴィクトリア朝随一のベストセラー大衆小説と、トマス・ハーディの文学世界」が行われた。自身のミセス・ウッドのセンセーション小説『イースト・リン』との出会いから話を始められた井出氏は、ハーディの『青い瞳』や『カスターブリッジの町長』などに見られるハーディの“Nature” 観に触れ、これらの小説にあらわれる「気まぐれ」、「逆説的矛盾」といったものと同じニュアンスのことは――“capricious” や “the rules of contrary”――が『イースト・リン』にも登場すると述べられた。井出氏は、さらに、『テス』でお馴染みの“too late” というモチーフが、『窮余の策』のちょうど10年前に出版された『イースト・リン』、あるいはポーやボードレルなどの作品において、どのように扱われてきたか紹介された。井出氏は、次に、“too late” のモチーフが、なぜ1850-60

年代に集中してあらわれたかという問題に話題を移され、この時代は社会構造が流動化し始め、「革命」からは遠ざかったが「日々改革」という近代的状況に人々は置かれ、各々の自分の居所や、「今ここ」が不明確になってきた時代だからだと指摘された。井出氏は、さらにこの問題と、この時代のメルクマールである1851年の第一回万国博覧会との関連性について考察され、ウッドがこの小説に勤しんだのが、万博が終わってロンドン南部にクリスタル・パレスが移築された1854年であり、彼女がこの近代産業革命の遺構を間近に臨む土地で執筆したのは象徴的であり、この眺望のおかげで、執筆直近の英国文明社会制度の移り変わりのあり様が小説中に極めて巧妙に組み込まれていると指摘された。この他にも『イースト・リン』とハーディの小説世界の共通点（実存的な問題の存在や、近代と土俗的な前近代が同居している点など）、相違点（『イースト・リン』における“cross”[十字架；不機嫌になる；横切る]などに見られる“pan”の多用）、『イースト・リン』の文体の特徴や劇化版の話など、様々なトピックを提供され、講演を終えられた。

すべてのプログラムが無事終了し、玉井暁会長の閉会の辞で大会が閉じられた後、11号館1階のチューデント・ラウンジに場所を移し、懇親会が和やかな雰囲気の中で行われた。最後に、気象状況がよくない中、円滑な大会運営をお世話下さった茨城キリスト教大学や協会事務局の皆様方に、心からの御礼を申し上げたい。

## 1<sup>st</sup> International Conference on Narrativeでの 講演とシンポジウムについて

工 藤 紅

2013年12月6日（金）、7日（土）、名古屋大学において、1<sup>st</sup> International Conference on Narrative “Hardy and James” が開催された。7日には、このために来日されたThe Thomas Hardy Association会長、The Thomas Hardy Society副会長であるローズマリー・モーガン氏による基調講演と、ヘンリー・ジェイムズとトマス・ハーディの語りに関するシンポジウムが行われた。様々な分野の研究者たちが日本各地から集い、終始和やかな雰囲気の中で活発な議論が交わされた。この報告は、モーガン氏の講演と、金子幸男氏、福原俊平氏、上原早苗氏の三人によるハーディに関するシンポジウムに関するものである。

モーガン氏の講演は、“Reconciling Thresholds: Opening Narrative Skirts in Hardy’s *Far from the Madding Crowd* and *Jane’s The Portrait of a Lady*” というテーマで、ハーディの『狂乱の群れを離れて』と、ジェイムズの『ある貴婦人の肖像』の冒頭の数章を詳細に分析し、比較された。『狂乱の群れを離れて』の特に最初の2章は、Leslie Stephenの要望通りに書かれ、当時の流行や女性の描き方などに関して、至る所にStephenの厳しい検閲が入った。語りが大きく変化するのは第6章からで、村人たちの声が、つまり第三者の視点を取り入れられる。またプロットも展開し、オークはバスシバと再会する際にヒロイズムを見せ、また謎の女が走って逃げて行くなど、ミステリーの要素が入り込んでくるのである。

次にモーガン氏は、『ある貴婦人の肖像』の分析に移った。この作品の冒頭は、退屈なアフタヌーンティーでの会話の場面から始まり、その後登場人物の紹介が続くが、それらの場面に現れるようなリズムカルな‘speech act’は、ヴィクトリア朝には珍しいものであり、興味深い。ここでの登場人物たちの退屈に思われる会話は、実は、彼ら自身の退屈を表しており、アメリカ女

性イザベル・アーチャーの出現を強く読者に印象付ける。

ハーディは、'bystander narrator' と 'conditioning narrator' という2つの語りを取り入れている。前者は全知の視点とは異なる「目撃者」として語り、後者は読者との間に介入し、条件法や 'may'、'assume'、'perhaps' などを用いて不確かなことを述べる。前者は、選択可能なもので、読者に同じように感じてもらうため、後者は、違ったレベルで読者の興味を惹きつけるために採用される。それらは厳格な編集者Stephenと、口やかましい読者たちを満足させるものであった。

ハーディもジェイムズも、登場人物の疎外感、そして自由を目指す美しいヒロインを描いているが、前者が田舎の社会の中で階級や立場など、全てを受け入れるのに対し、後者は一貫してアウトサイダーの視点から葛藤を描いており、世界観の相違は決定的なものである。

続いて行われたハーディに関するシンポジウムにおいて、金子氏は、“Narrative of Englishness in Thomas Hardy” というテーマのご報告で、Wessexを用いてEnglishnessを描く作家であるハーディが、小説でどのようにそれを描いたのかを検証された。まず初めに、Englishnessとは何かを、批評家たちの定義を用いて明らかにされた上で、A. D. SmithによるEnglishnessの基本的な要素である 'A historic territory, or homeland' と、'Common myths and historical memories' が、『帰郷』で描かれていることを示された。この作品では、Englishnessが語り手によって描写されると同時に、登場人物たちもまたそれを様々な形で表現する。質疑応答の際には、ハーディがアウトサイダーの視点を取り入れていること、またそれが、中産階級の読者に、架空のコミュニティの話を読んでいるのだということを意識させるためだったのではないかと指摘された。

続いて、福原氏が“Sympathy with Animals: Darwinism and Morality in *Tess of the d'Urbervilles* and *Jude the Obscure*” というテーマで、『ダーバヴィル家のテス』と、『日陰者ジュード』における動物に対する語り手と登場人物たちの態度を検証された。他の道徳的な話では、動物を大切にす人物が報われ、虐待した人物は何らかの形で罰せられるのに対し、ハーディの作品では動物に対して優しい気持ちで接し、共感を持つ人物であっても苦しめられる。主人公たちは、種としては下等とされる動物に共感を寄せることで、それと同じレベルに立つ。同時に、動物に共感する主人公の視点で作品を読む読者は、彼らに共感し、社会の本質を考えさせられることになるのである。

最後に、上原氏が、“How May We Interpret Sue's Story? : A Note on the Narrative in *Jude the Obscure*” という報告をされた。作品中、実は、語り手の視点、つまりジュードの視点のスーと読者の間に入り込み、スーの本心を分かりにくくしてしまっていることを指摘された。実は、マニユスクリプトを丹念に検証すると、スーの本心を知ることができるのであるということ、様々な資料を提示されながら詳細にご説明された。スーは自分自身の声で語ることができ、自分を弁護することもできたのだということを示された。

今回の集会は、名古屋大学のご協力の下、上原氏の全面的なご尽力のおかげで実現したものである。モーガン氏は来日の間は、上原氏と共にプライベートでも様々な観光地へ出向くことになっていたようで、大変楽しそうだった。このような機会をくださった上原氏には心から感謝申し上げます。今年も第2回大会が開催されることを期待したい。

## 個人消息：二つの拙著について

森 松 健 介

昨年末に、私は『二〇世紀のジェーン・オースティン：バーバラ・ピム全貌』（音羽書房鶴見書店、2,800円）を刊行させていただきました。これをここに記すのは、この女流作家がハーディの愛読者で、作品中にハーディからの影響が顕著に見られるからです。

本書の32箇所ハーディへの言及があります。中でも『窮余の策』、『森林地の人びと』と『テス』などの継承（46ページ）、ヒロインの『ジュード』や『ハーディ詩集』への言及（109ページ）などは、バーバラ・ピムがハーディの全作品に関心を持っていたことの証左です。

ハーディ詩編への関心は際立っており、詩の想いを小説に転化したピムの力量に圧倒されま  
す。「暗闇のツグミ」、「私は鏡を覗き込む」、「私の出ていったあと」、「声」、「彼岸にある友たち」、「歩行する死人」などの有名詩編だけではなく、「下宿屋のフクシア」（詩番号835）、「沈黙のさまざま（849）」、「瞑目のあとで」（223）、「子孫途絶えて」（690）、「悩める友人への告白」（36）、「まだ判っちゃいない」（240）、「眠れる歌い手」（265）、「息子の肖像」（843）、「彼女から彼への愁訴Ⅰ」（14）、「ある拒絶」（778）など、一般には知られていない作品からの影響も強く受けています。これは『ハーディ詩集』がピムの座右の書であったことの現れです。

なお、私は昨年3月末にも、『イギリス・ロマン派と《緑》の詩歌』（中央大学出版部、4,300円）を出版いたしました。この中にも15箇所のハーディへの言及があります。いずれもご愛読いただければ幸いです。



FROSTY MORNING by J. M. W. Turner

（提供：那須雅吾氏）

# 事務局よりのお知らせ

## 会費納入について

今年度の会費納入をお願いいたします。会計年度は4月から翌年3月までで、年会費は4,000円です（学生・大学院生は年1,000円です）。当協会の会費は、長年にわたって値上げをしておりません。ほかに維持会費として、任意の一口1,000円のご寄付をいただいています。とくに、役員の方は、ご協力いただけると幸いです。なお、顧問の先生は、一般会費のお支払いは不要です。

日本ハーディ協会の振替口座番号は00120 - 5 - 95275です。会費は、郵便局からお振込みください。同封の振替用紙をご利用の場合は、手数料をお支払いいただく必要はありません。よろしくをお願いいたします。

## 次回大会について（研究発表募集）

次回第57回大会は、今年の11月1日（土）に、西南学院大学（福岡市早良区西新6-2-92）で開催されます。研究発表にご応募の方は6月30日までに、①発表要旨：日本語で発表される場合は600字程度、英語で発表される場合は150字程度、②カバーレター：発表タイトル、お名前、所属大学・機関、身分、連絡先（メール・アドレスを含む）を記した用紙、③略歴表、の三つを添えて、協会事務局までお申し込みください。発表時間は25分で、ほかに5分程度の質問時間を設けます。簡単な審査のうえ、ご依頼いたします。多数のご応募をいただけますよう、ご期待申し上げます。

今回の大会でも特別講演とシンポジウムを予定しております。特別講演の講師は、鶴飼信光先生（九州大学文学部教授）です。演題は、「生命の力の主題化——V.ウルフ、E. M. フォースターの先駆けとしてのハーディ」を予定しております。鶴飼先生は、19-20世紀英国小説の専門家で、オースティンからE. M. フォースターに至る7人の小説家を論じたご著書、『背表紙キャサリン・アーンショー—イギリス小説における自己と外部』（九州大学出版会）を、昨年、ご出版なさっています。ハーディについての新鮮な角度からの興味深いご講演を拝聴できるものと楽しみにいたしております。

シンポジウムは、渡千鶴子先生（関西外国語大学短期大学部教授）が中心になって、「ハーディ作品を教材としていかに用いるか」（仮題）というテーマをめぐってご準備いただいております。文学作品を英語教材として使用するのが難しくなっている（と伺っている）大学での現状に鑑みて、ハーディ作品をいかにして英語・英文学教育に活かすのか、協会会員の皆様と一緒に考えてみたいと存じます。発言者等の詳細は次号の協会ニュースでお知らせいたします。

## 《内外ニュース》

平成25年秋の叙勲受章：

2013年11月11日に、皇居に於いて、那須雅吾氏と深澤 俊氏のお二人が瑞宝中綬章を受章された。

会員による研究書・翻訳書：

森松健介著 『イギリス・ロマン派と《緑》の詩歌』（中央大学出版部、2013年3月）

武井暁子・要田圭治・田中孝信共編

『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』（音羽書房鶴見書店、2013年8月）

森松健介著 『二〇世紀のジェーン・オースティン：バーバラ・ピム全貌』（音羽書房鶴見書店、2013年12月）

金谷益道 他12名著 『幻想と怪奇の英文学』（春風社、2014年3月）

押本年眞訳 第14-3巻 『霸王たちⅢ』（大阪教育図書、2014年3月）

新妻昭彦訳 第11巻 『森林地の人々』（大阪教育図書、2014年3月）

ハーディに関する講演会：

2013年12月7日に、名古屋大学に於いて、Rosemarie Morgan 氏による講演があり、金子幸男氏、福原俊平氏、上原早苗氏によるHardyに関するシンポジウムが行われた。

2014年1月25日に関西大学で、斎藤兆史氏による「ハーディ作品を用いた英語・英文学教育」と題する講演会があった。

## 《編集後記》

平成25年秋の叙勲受章で、那須雅吾先生と深澤 俊先生が瑞宝中綬章を受章されました。おめでとうございます。「日本ハーディ協会」創設当初から、協会運営に多大なるご尽力とご貢献をされてこられたお二人の大先輩が同時に叙勲されたことは、とても素晴らしいニュースです。ハーディ文学の若手の研究者がだんだん減っていく状況の中で、これからの協会を担っていく私たち後輩にとっては、誇りであり、力強い励みになります。

2014年2月7日から23日まで、ロシアのソチで冬季オリンピックが開催されました。ロシアの威信と技術をかけた盛大な大会になり、世界の80ヶ国以上の国と地域から、約2800名の選手が参加しました。当然のことながら、人智の予測を超えたスポーツの戦いの場があり、人間のドラマが展開されました。テーマは、“Hot. Cool. Yours.” だったそうです。オリンピックに向けて、絶え間ない努力をしてきた選手たちが、本番で自己ベストを上回る成績を出す場合もあれば、普段の力を全く発揮できない場合もあります。これを「実力」で片づけてしまうのは簡単ですが、何か我々には計り知れない大いなる力の存在を感じてしまいます。

さて、第75号から編集作業を引き継ぎました北脇徳子です。なにぶん不慣れで至らぬ点も多いかと思いますが、どうか皆様のご指導とご協力をよろしくお願い申し上げます。ご多忙の中、玉稿をお寄せくださいました執筆者の方々のご協力、前任者の渡 千鶴子氏の助言と激励、中央大学生協印刷部の藤様のご尽力に、心からお礼申し上げます。

次号は9月発行の予定です。原稿の締切日は7月10日です。論文、随筆は2000字程度、短信、個人消息は500字程度です。皆様、奮って原稿をお寄せください。尚、ハーディに関する著書、翻訳などもございましたら、編集者までご連絡ください。お待ちしております。